

『パリのセーヌ河岸』

～パリオリンピック 2024 の舞台となった歴史的建造物～

1. ご挨拶

こんにちは。名古屋地区の認定講師、^{とよさき}豊崎と申します。はじめましての皆さまには自己紹介として、名古屋を中心に、学校や自治体で世界遺産の講座を担当している者です。「マイスターのささやき」へ久しぶりに投稿をさせていただきますが、前回の投稿から約 10 年ぶりになると教えていただきまして、それは怠け過ぎたと、たいへん反省しております。

今回、題材に選んだのは『パリのセーヌ河岸』です。ご承知の通り、「パリオリンピック 2024」が 7 月 26 日～8 月 11 日に開催されましたが、オリンピック史上初めて競技場を出て、セーヌ川を船に乗って入場行進する画期的な開会式が開催されました。また、競技場としても、世界遺産に登録されている区域内の多くの歴史建造物が使用されました。それについて、大学での講義で解説したところ、学生の反応がとても良く、私自身も、数年前にパリに訪れた時のことが鮮明に思い出されたので、これは文章化しておいた方が備忘録としても良いかなと、投稿を思い立った訳です。記憶に新しいパリオリンピックに関連する世界遺産を、川の上流から下流の順に取り上げていきます。

2. セーヌ川の中洲 シテ島

開会式の出発点は、オステルリッツ橋でした。世界遺産の登録範囲はシュリー橋からイエナ橋まで約8 km にわたる川沿いで、範囲内の右岸、左岸、中洲のシテ島、サン・ルイ島の建造物や、それらを結ぶ橋などが、世界遺産の構成資産になります。最も名前を知られるポン・ヌフ橋の左岸側には、フランス造幣局があります。オリンピックといえば金・銀・銅メダルが話題に挙がりますが、今大会のメダル中央のエンブレム部分には、エッフェル塔の改修工事で取り除かれた柱の一部が使われたそうです。（写真①）セーヌ川に浮かぶ船は選手団が乗っていたかもしれません。何しろ、セーヌ川を運行する船を40 艇以上動員して選手団を運び、ダンサーを乗せたパフォーマンスにも使用されました。



写真①「ポン・ヌフ橋の右岸側から左岸側への眺め 真ん中の建物が造幣局」

エンタメオタクでもある私に一番刺さったのが、レディ・ガガのパフォーマンスでした。ダンス、生歌、ピアノまで！ 彼女がピアノを弾いた場面で後ろに見えていたのが、シテ島に建つノートル・ダム大聖堂です。シテ島の歴史は古く、約2,000 前からケルト系の人々が住み着いたのが起源とされています。10 世紀以降、カペー朝が王宮を建造したことでフランス王朝の中心として発展、統治のシンボルとして12 世紀に大聖堂建設が始まり、800 年余りの時を経てフランス最大級の大聖堂が建造されました。着工当時の聖堂建設の主流はロマネスク様式が主

流でしたが、フランス最大の天井高を目指して、ゴシック建築の特徴であるヴォールト天井と壁面を支えるフライング・バットレス（飛梁）の工法が採用されました。高さを得られたことで壁には多くのステンドグラスがはめられ、光に包まれた明るい空間が生まれ、まさに中世の建築工学の叡智^{えいち}が結集された貴重な文化遺産がノートル・ダム大聖堂と言えるでしょう。

しかし、ノートル・ダム大聖堂は、2019年4月の火災で屋根が燃えて崩落しました。ジャン＝ジャック・アノー監督の『ノートルダム 炎の大聖堂』で詳しく描かれ、ディズニー・アニメ映画『ノートルダムの鐘』の舞台ともなりました。大聖堂の鐘楼（いわゆる鐘つき堂）も含めて、建物全体が崩落する危険があったのだそうです。懸命な消火活動で、建物が全壊する危機から大聖堂を救った消防士たちの活躍も、映画では描かれています。

実は出火当時、尖塔の修復工事のために、鉄骨の足場が組まれていました。火災によって、尖塔や屋根だけでなく、この足場の鉄骨5万本の半分も焼け落ちました。聖堂内部に散乱し、燃え残った500t分の足場は、いつ崩れても不思議ではない状況だったのです。不安定な部分を撤去する作業を、しかも高所でしなければならなかった時に登場したのが、ロープアクセス専門の技術者たちでした。開会式でも、ロープに吊られたダンサーのパフォーマンスによって、熟練した専門家集団によって修復工事の足がかりが作られていった場面が、上手く表現されていました。また、イギリスBBC放送が制作した番組『ノートルダム大聖堂 悲劇からの再建』では、大聖堂の木製屋根について触れていました。木製屋根は鉛で覆われていて、この鉛が火災の熱で溶け出してしまったのです。鉛には強い毒性があるため、職人たちがステンドグラスのガラスを1枚ずつ丁寧に汚染を除去する様子を見ていると、たったひと晩の火災でこれほどの事態が引き起こされ、再建のために膨大な作業が必要である現実を思い知らされました。建築家、歴史家、科学者、職人たちの手による、この巨大な再建プロジェクトは、これまでに類を見ない文化財修復の試みです。世界遺産は保全が最重要であることの再確認にもなっていると感じました。

私が訪れた2020年2月（写真②）。火災によって脆^{もろ}くなったバットレス部分に、木材の骨組みをはめて補強している様子が、確認できます。この原稿を書いている2024年8月25日現在、2024年12月の聖堂内部公開を目指して、修復工事が進行中です。5月には屋根の尖塔の

復元工事が完成しました。お披露目に拍手の挙がるニュース映像を観て、パリ市民が尖塔の復元を待ち望んでいたことを実感しました。こぼれ話として、屋根の尖塔に関しては、ガラス張りのモダンデザインに変更して復元する案もありましたが、元の姿に復元することで決着したそうです。



写真②「修復工事中のノートル・ダム大聖堂」2020年2月5日筆者撮影

ノートル・ダム大聖堂の他にも、シテ島には歴史的建造物があります。コンシェルジュリーは、カペー朝が王宮として建造した建物の一部で、フランス革命の時には監獄として使用され、マリー・アントワネットが幽閉されていたことでも有名です。右岸側に面した建物壁面を

使用して、フランス革命をテーマにした開会式パフォーマンスも行われました。シテ島にはサント・シャペルもあり、ゴシック教会の代表例のひとつとして、写真をお見せしようかと思いましたが、オリンピックの会場ではなかったので、またいつか別のテーマの時にいたします。

3. 右岸エリア

開会式のダンス・パフォーマンスといえば、パリ市庁舎の屋根で踊るパリ・オペラ座のエトワールダンサーや、ポン・ヌフ橋の上では高い棒に乗ったダンサー達がパフォーマンスされていて、とても見応えがありました。パリ市庁舎は、マラソンのスタート地点（写真③）マラソンコースは市街地を駆け抜けるコースで、ルーヴル美術館（ルーヴル宮殿）に隣接するチュイルリー庭園（元宮殿跡）との間に建つカルーゼル凱旋門の前も走り抜けましたが、このカルーゼル凱旋門はシャンゼリゼ通りのエトワール凱旋門とは違い、少し小ぶりなサイズで、同時代の建造物です。ちなみに、観光地として超有名なエトワール凱旋門やパリ・オペラ座は、世界遺産の範囲外、つまり、世界遺産ではないのです。参考として、マラソンコースの折り返し地点になったヴェルサイユ宮殿は、セーヌ河岸とは別の世界遺産で、正式名称は『ヴェルサイユ宮殿と庭園』、庭園の一部が馬術競技に使用されました。自称“初老ジャパン”の選手 of 皆さんが大活躍をされた競技でした。

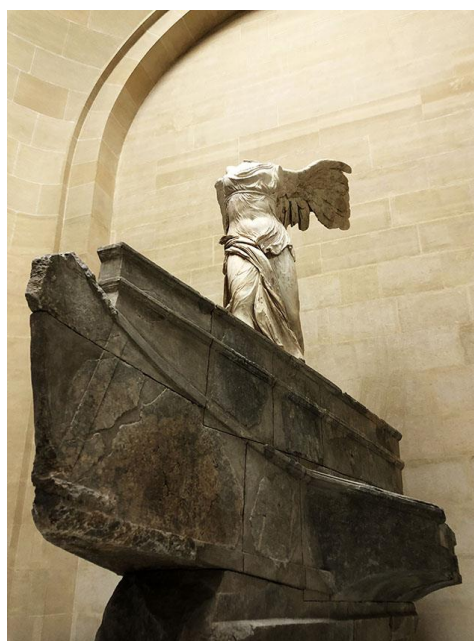


写真③「マラソン競技のスタート地点になったパリ市庁舎」

ルーヴル美術館は、左岸のフランス学士院（王政時代の国立アカデミー）とアヤ・ナカムラさんのパフォーマンスも印象的だったポン・デ・ザール橋で繋がっています。ルーヴル美術館の入口には、ルーヴル・ピラミッドがあります。写真④はパノラマに引き伸ばされていますが、実際の建物はコの字型をしています。ルーヴル・ピラミッドは、美術館のメイン・エントランスとして、1989年に造営されました。開会式では、聖火を運ぶフードを被った謎の人物が美術館内部へと入っていき、辿り着いた先にサモトラケのニケ像（写真⑤）がありました。古代ギリシャの女神ニケの彫刻がかつて船に乗っていたことを知っていますか？そして、ルーヴル所蔵の名画『モナ・リザ』が盗まれて、セーヌ川に浮かぶという演出もありましたね。さて、ここでクイズです。絵画は世界遺産になるのでしょうか？ 答えは、世界遺産には不動産しかなく、絵画は動産（動かせるもの）なので、世界遺産ではありません。『モナ・リザ』が収蔵されているルーヴル美術館は、不動産（建物）なので、世界遺産です。



写真④「ルーヴル美術館とルーヴル・ピラミッド」



写真⑤「サモトラケのニケ像（ルーヴル美術館所蔵）」

セーヌ川をもう少し下ると右岸に見えてくるのが、コンコルド広場のオベリスクです（写真⑥）チュイルリー庭園の西側の端にあるコンコルド広場は、日本人選手も大活躍したスケートボードや、新競技のブレイキンなどの会場になりました。自転車が空を飛ぶ競技 BMX フリースタイルで、たびたび背景に映り込んでいた塔がオベリスクです。このオベリスクは、もともと古代エジプトの遺跡ルクソール神殿（世界遺産『古代都市テーベと墓地遺跡』の一部）の入り口に対の形で2本建っていたもので、19世紀前半に当時のエジプト国王から寄贈されました。ルクソールの観光ガイドさんは必ず「この片方はフランスのパリにあるのです」と少し残念そうに説明されるのだと、旅行でエジプトを訪れた知人から聞いたことがあります。



写真⑥「コンコルド広場のオベリスク（奥にエッフェル塔）」

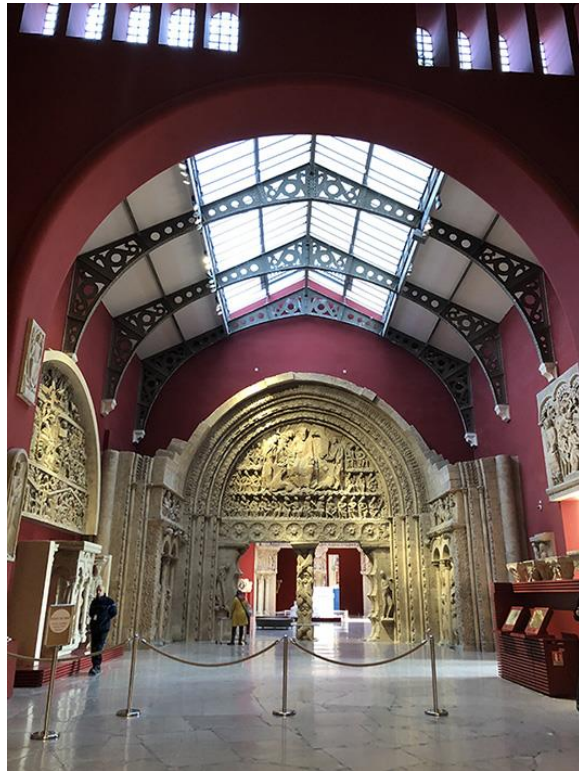
コンコルド広場を西に進んでいくと、巨大なガラスの屋根を持つ建造物グラン・パレが見えてきます。開会式のフランス国家 斉 唱^{せいしょう}が屋上で行われたことに加えて、日本人選手が大躍進を遂げたフェンシングの競技会場としてもニュースに何度も登場していたので、印象深い建物です。グラン・パレは、1900年パリ万博の時に、向かいに建つプチ・パレと一緒に建造され

ました。新紙幣の肖像に選ばれた^{しぶさわ えいいち}渋沢 栄一が^{とくがわ あきたけ}徳川 昭武（第 15 代将軍・^{とくがわ よしのぶ}徳川 慶喜の異母弟）の幕臣時代に訪れたのは 1867 年開催の「パリ万博」でしたが、その次のパリ万博（1889 年）でエッフェル塔は建設され、20 世紀初のパリ万博（1900 年）で、グラン・パレ、プティ・パレ、アレクサンドル 3 世橋が建造されました。当時造られたパビリオンが 100 年以上も有効活用されていることに、少し驚きを覚えます。



写真⑦「セーヌ川に架かるドゥビリ橋」

写真⑦は、そろそろ選手団の船が終点に達する場所です。緩やかに南西方向に下っていくセーヌ川にドゥビリ橋が架かっています。ここでは、ファッションショーを模したダンス・パフォーマンスが行われました。そして、船の終点であるイエナ橋に着きます。イエナ橋は、エッフェル塔とトロカデロ広場を繋ぐ橋で、馬上の騎士が聖火を運び、聖火台のあるトロカデロ広場に聖火を届けました。エッフェル塔を形どった舞台デザインが、とてもお洒落でした。トロカデロ広場の後方には^{ばていけい}馬蹄形のシャイヨー宮が建っていて、北側に建築・文化財博物館が入っています。（写真⑧）パリには数多くの美術館・博物館がありますが、世界遺産エリアの中では、ルーヴル、オルセーを周った次にお薦めします。聖堂ファサードの実寸代レリーフ（レプリカですが）はたいへん見応えがありました。そして、2 階には「国立西洋美術館」でも知られるル・コルビュジエのほぼ全作品の模型や図面など、近代建築の資料も充実しています。



写真⑧「シャイヨー宮、建築・文化財博物館の入口」

4. 左岸エリア

開会式のクライマックスは、トロカデロ広場の式典会場に設置された各国の来賓席の真正面に、美しくライトアップされたエッフェル塔がお目見えし、その存在感は圧倒的でした。五輪のマークが飾られたエッフェル塔のバルコニーに立つセリーヌ・ディオンがエディット・ピアフの代表曲『愛の賛歌』を熱唱して、バックに花火が上がる演出。ちなみに、エッフェル塔はオリンピックに向けてお色直しをしていましたね。下から順に、濃い茶色から薄い茶色（ブロンズ系）へとグラデーションにして立体感を出し、より見栄えを良くしたのだそうです。エッフェル塔が建つシャン・ド・マルス公園（写真⑨）は、とにかく広大（東京ドーム 60 個分もの広さ）です。塔のお膝元にはビーチバレー会場が置かれ、公園の反対側の端には、連日、柔道競技で沸いていたシャン・ド・マルス・アリーナとなっていました。そして、その向かいの旧陸軍士官学校（エコール・ミリテール）（写真⑩）までが世界遺産の登録範囲で、その裏手に建つユネスコ本部は範囲外です。



写真⑨「シャン・ド・マルス公園に建つエッフェル塔（奥が右岸）」



写真⑩「シャン・ド・マルス公園から観たエコール・ミリテール」

エコール・ミリテールから北東へ少し歩くと、アンヴァリッド（旧廃兵院）があります。（写真⑪）ナポレオン1世やその家族、偉人たちの眠る霊廟であり、セーヌ川に面した広い前庭がアーチェリーの競技会場として使用されました。また、マラソンのゴールにもなっていたので、ゴールテープのシーンを思い浮かべていただければ、その背景に見えていた建物がアンヴァリッドです。アンヴァリッドにも見応えのある軍事博物館があり、ヴォーバン式の城塞都市の精巧な模型が多く展示されていて、お勉強に最適な環境でつい長居をしてしまいます。セーヌ川と比べると少し高いところに位置しているため、アンヴァリッドからセーヌ川に架かるアレクサンドル3世橋やグラ

ン・パレを見下ろす場所は、吹き抜けの良いフォト・スポットかも知れません。（写真がなくて申し訳ないです）



写真⑩「アンヴァリッド内部」

5. まとめ

最後に、パリオリンピック閉会式で締め括りたいと思います。まず、ルーヴル美術館に隣接するチュイルリー庭園の噴水に聖火台が設置され、開会式では気球の形で空に浮かんだ姿が印象的でした。世界初の気球の実験が行われたのがこの庭園なので、ここが設置場所に選ばれたそうです。聖火は、閉会式の会場のサン＝ドニにあるフランス最大の国立競技場スタッド・ド・フランスへ運ばれました。セーヌ河岸地区の北、パリ 20 区の外に位置しますので、この競技場は世界遺産登録範囲ではありません。閉会式は、開会式と同様、トマ・ジョリー氏が芸術監督を担当され、感動のフィナーレでした。一部の演出（ギロチン表現のくだり）が SNS で取り沙汰されていましたが、ああいったことも、フランス人のユーモアやエスプリと解釈できるのではないのでしょうか（あくまでも個人の見解ですが）。ステージの形は 5 大陸を模して作られていて、ボーダーレスやジェンダー平等といった現代の我々が問われている国際的な課題と価値観を、質の高いパフォーマーによって美しく表現しつつ、多様性を反映させた質の高いショーになっていたことが、パリオリンピック式典の成功を疑わない理由です。同じく、多様性の象徴である世界遺産の教育に携わる日々の中で、若い世代に対して、多様な文化を伝える糧^{かて}をくれた今回のパリオリンピックから得られた感動が新鮮

なうちにと、本稿の寄稿を思い立ちました。私の拙^{つたな}い文章をここまで読んでくださった皆様にも感謝の気持ちを伝えさせていただき、本稿を締め括らせていただきます。

2024年8月25日

世界遺産アカデミー認定講師 豊崎美紀